

## ウィトゲンシュタインと動物

——『心理学の哲学 2』の考察を中心として——

槇野 沙央理

本稿は、ウィトゲンシュタインにとって動物はどのような存在であったかという問題<sup>1</sup>を、後期の遺稿『心理学の哲学 2』を中心に考察するものである。この問題は、さらに細かい二つの問いによって構成されている。第一の問いは、ウィトゲンシュタインにとって人間と動物の関係はどのようであったかというものである。つまり人間と動物のあいだの類似性と断絶を彼はどのようにとらえたかということが問題となる。第二の問いは、ウィトゲンシュタインのテキストにおける動物の存在意義がどのようであったかというものである。つまり、動物は考察対象としてどのような役割を果たしたかという問題である。本稿では、第一の問いを考察することを通して、第二の問いに回答する。

### 1. 反応における類似性

後期ウィトゲンシュタインのテキストには、言語使用を原初的な水準でとらえようとする傾向が散見される。こうした傾向の中でも、最も原初的な水準に言及していると考えられるのが、『原因と結果』の中で「反応」として言語使用をとらえる態度である。

ゲームの極めて原初的な形式は、他人の悲嘆の声や身ぶりに対する反応、同情の反応、等々である。(UW p. 380)

反応とは、神経系を介して生じる反射のことではなく、ある働きかけに応じて生じる相手の変化や動きを指している。とりわけウィトゲンシュタインが

注目していたのは、他人の痛みに対する反応である。他人が痛みを耐えかねてうめき声をあげ、涙を流したり、腹をおさえたりするのを見てわれわれは、その人がたとえ言葉を使いこなせない子どもや動物だったとしても、目の前にいれば介抱してやる。当然ながら、痛みの身ぶりはすべての人間において同じではなく、その人が育ってきた時代や文化によって異なる。動物においても、すべての動物がうめき声をあげるのではない。だがここで重要なことは、相手の痛みの身ぶりに対して一定の反応をしてやるということであり、それがわれわれの言語の営みを考えるうえで欠かせないものであるということだ。痛がっている人を無視したり、痛みの振る舞いをただちに痛がっているものと理解できなかつたりすることはありうるが、こうした場合が常態である、ということは考えられない。この意味で反応は、「原初的な形式」なのである<sup>2</sup>。

ウィトゲンシュタインは、極めて原初的なやりとりに言語の原初的な形式を見いだした。その背後には、分節可能な言葉を用いなくとも、身ぶりや感嘆詞によってやりとりが成立するという主張があった。『断片』における「痛み」の考察を見てみよう。

ここでは、自分の痛みの箇所ばかりではなく、他人の痛みの箇所の面倒を見、手当をすること、つまり、自分の痛みの振る舞いには留意せず、他人の痛みの振る舞いには留意するということといった、原初的な振る舞いを考えることが助けになる。(Z §540, 傍点強調は原文)

この節の主旨は次の通りである。すなわち、私は自分の痛みを感じ、うめく。一方他人に関しては、私はその痛みを感じるのではないが、その人がうめき、冷や汗を流すのを見る。つまり振る舞いに、私の痛みと他人の痛みの差異が表れているのである。われわれは、自分のうめきに対しては反応しないが、他人のうめきには反応する。その際、われわれは他人のうめきに直接的に反応するのであり、類推を介してから反応するのではない。他人がうめくを見て、自分がうめく場合を想像し、自分がうめく場合は痛みを感じている場合であると考え、それゆえ他人は痛みを感じているのだという類推は

行われぬ。他人がうめくのを見たとき、われわれはすぐその人を介抱する。これが「原初的な振る舞い」である。

他人が痛がっている振りをしているのではないかと思われるときは、介抱をしないことがある。だから、他人がうめくときはいつも、その人が偽っていないかどうか疑いをもって接する必要がある、それゆえ類推が必要になるのだと反論されるかもしれない。しかし、他人を疑うということは、介抱することと同様に、他人のうめきに対する反応の一つである。疑いを抱くとき、われわれは例えば、首を横に振ったり、かしげたり、顔をまじまじと見たり、肩をすくめるジェスチャーをしたりする。他人が痛がっている振りをしていることがありうるということは、他人が痛がっている振りをしている場合は介抱せず別の反応をする、ということの意味するのであって、いつも他人の振る舞いに対してわれわれが疑いをもって接し、毎度類推を行うということの意味しない。

あなたは、かくかくに感じたときには自分ほうめく、ということを経験によって学んでいるから、うめいている人を介抱するのだ、という。だが、あなたはそこでそのような結論をひきだしてはいない。だからわれわれは、類推をとおした根拠づけを省くことができる。(Z §537)

ウィトゲンシュタインは、「原初的な振る舞い」(Z §540)において私と他人の痛みの差異を見てとり、類推を介した判断として、他人の痛みの確実さや疑いを考えることを退けた。他人が痛みをもっていることが確実であるとか、疑わしいといったことは、自分の場合から他人の場合を類推した結果判断されるのではなく、他人のうめきに反応して介抱し、あるいは肩をすくめるジェスチャーによって接することなのである。

次の箇所では、ウィトゲンシュタインが「ある種の反応」というところのものも、「原初的な振る舞い」(Z §540)が示すものと同じである。

疑いと確信が言語によってではなく、単に行為や身ぶり、表情によって表現されていると想像してみよう。それは例えば、非常に原初的な人々

や、動物の場合にありうるだろう。では、ある母親を想像してみよう。彼女の子どもが泣き出して頬を押さえる。というわけである種の反応は、その母親がその子を慰めようとつとめ、何らかの方法で世話をすることである。……(UW p. 382, 傍点強調は原文, 下線部強調は引用者)

注目すべきは、他人のうめきに対して「行為や身ぶり、表情」をもって反応することは、「非常に原初的な人々や、動物の場合にありうる」と言われていることである。ウィトゲンシュタインは明らかに、反応の水準に人と動物の強い類似性を見てとっている。強い類似性とは、第一に、人間の反応も動物と同じく言葉を用いられずに行われるということの意味する。相互的な反応に、必ずしも分節化可能な言葉は必要ではない。身ぶりや表情、声の抑揚、感嘆詞によって、相手の振る舞いに自分が反応し、それに対して再び相手が反応するというやりとりは十分に成り立つ。

第二に、人間の反応がたとえ分節化可能な言葉を用いて行なわれることがあるとしても、基本的には他人のうめきに対して何らかの反応をとってやる、という形式において「原初的な人々や、動物」の場合と同様であるということの意味する。それゆえ相互的な反応は、人間同士だけではなく、人間と動物、もしくは動物同士にも成立しているといえるだろう<sup>3</sup>。

一概に相互的な反応と言っても、動物同士のあいだで生じるものと、人と人ととのあいだで生じるものは異なると反論されるかもしれない。ウィトゲンシュタインも人間同士のやりとりのすべてが、動物のシグナルと同じであるとは考えてはいないだろう。例えば、反論をすることや皮肉を言うことは人間同士のやりとりの中にあり、人と動物、もしくは動物同士のやりとりの中にはない。だがウィトゲンシュタインが「原初的な形式」としての「反応」という表現によって言わんとすることは、複雑さの程度を度外視すれば、言語の営みというものは、そもそも相互的な反応によって営まれる応答関係なのである、ということだ。もちろんこれは、突き詰めればすべての言語使用は反応であるということの意味しない。そうではなく、われわれの言語使用から相互的な反応を排除することはできない、ということの意味する。例えば、決して独り言を言わない民族がいたとしても、彼らが言語を使っていること

は否定できない。しかし、相互的な反応をしない言語使用を営む民族を想像することはできない。その民族がどのような生活を営んでいるか、われわれには想像する手だてがない。反応は、ウィトゲンシュタインにとってあくまで原初的な水準において、多くの存在者のあいだで共有されている型だったのである。

本節では、ウィトゲンシュタインの原初的な水準におけるやりとりの考察が、人間と動物の類似性を示すものであることを考察した。原初的なやりとりとしての反応とは、他人の痛みに対する疑いや確信の振る舞いであった。こうした反応は、人間と動物のあいだの強い類似性を示すものである。ウィトゲンシュタインにとって動物は、人間にとって言語が相互的なやりとりに役立てられるものであるということを感じさせる存在であったといえるだろう。

## 2. 心理的概念における類似性と断絶

ウィトゲンシュタインは、反応の水準に人間と動物の類似性を見ていたが、それは人間の言語使用をすべて動物と同じ反応の水準に還元するということを意味しない。彼はあくまで人間と動物の営みの差異を見てとっていた。ウィトゲンシュタインの遺稿の中で人間と動物の境界線が現われるのは、内的過程や心的状態を示す心理的諸概念の考察においてである。『哲学探究』第二部1節を参照しよう。

人は、ある動物が怒り、臆病であったり、悲しげであったり、嬉しそうだったり、驚いていたりするのを想像することができる。だが望んでいるのは？ では、なぜ想像できないのか。

ある犬が、自分の主人が戸口にいと信じている。だが、犬は、自分の主人が明後日やってくると信ずることもできるのか。一では、その犬はいったい何をすることができないのか。一私はこれをどのように述べればいいのか。一私はこれに対して何と答えるべきなのか。(PU II §1, 傍点強調は原文)

一つ目の段落でウィトゲンシュタインは、動物の情緒を示す振る舞いを想像することができる、と述べている。猿が縄張り争いで別の群れの猿に牙をむいたり、犬が暴力をふるう飼主を恐れたり、子どもを失ったゴリラの母親がうなだれたりする振る舞いを想像することは容易である。だが、希望の振る舞いに関してウィトゲンシュタインは疑問を呈している。また、二つ目の段落でウィトゲンシュタインは、犬が帰宅した主人が戸口の前にいることを信じているという。だが、犬が自分の主人が明後日帰ってくると信ずることに対しては、疑問を呈する。ここには、情緒と希望のあいだに区別があり、また眼前にある対象についての信念とそうでない信念の区別があるように見える。

ウィトゲンシュタインの区別は、どのような基準に基づいてなされたものなのだろうか。問題に答えるためには、ウィトゲンシュタインの「心理的概念」(BPP II §63)についての考察を検討しなければならない。ウィトゲンシュタインは『心理学の哲学 2』において、温度感覚、味覚、痛覚といった感覚(BPP II §63)と、怒り、恐れ、悲しみ、喜びといった情緒(BPP II §148)、また思考(BPP II §193)、信念(BPP II §154)といった知的な概念を相互に比較しあい、諸概念がもつ特徴を明らかにしようとした。『心理学の哲学 2』の 154 節を参照しよう。

希望を一つの情緒と名づけることができる。すなわち、希望は恐怖や怒りや喜びと同列に置かれる。希望は信念と似ているが、信念は情緒ではない。信念の典型的な身体表現というものは存在しない。

「絶え間ない痛み」の意味を、「絶え間ない怒り」、歓喜、悲しみ、喜び、恐怖と、また他方では「絶え間ない信念」や「絶え間ない希望」と比較せよ。

それにしても、恐怖、希望、憧憬、期待を互いに比較することは難しい。憧憬とは、思考の中で特定の対象を取り扱うことである。ある出来事に対する恐怖(心配 apprehension)は、同種のものと思われる。しかし、私に吠えかかる犬に対する恐怖はそうではない。ここでは二つの異なった言葉を用いることができるだろう。ちょうど、「期待する」がしかじかのことが起きることを信ずるという意味のみならず一期待の思考や活動

をしながら時を過ごす、つまり待ちわびるということをも意味しうるように。(BPP II §154, 傍点強調は原文)

ウィトゲンシュタインは一つ目の段落で、希望、信念、情緒の関係を考察している。希望は情緒と同列であり、信念とも似ているが、信念は情緒ではないという。このような比較をなす指標として挙げられているのは、「典型的な身体表現」の有無である。ウィトゲンシュタインは、「信念の典型的な身体表現」は存在しないという。確かに、ある人が別の人の言い分を信じるということを考えてとき、その典型的な身体表現を考えることはできない。さらに、恐怖や怒りや喜びといった情緒が、典型的な身体表現をもつことは明らかである(BPP II §320)。人が顔を真っ赤にして怒鳴りつけること、ライオンが牙をむいてうなり声をあげること、犬が尻尾をふってじゃれることは、情緒の典型的な身体表現である。それゆえ、典型的な身体表現の有無という指標に照らし合わせれば、「信念は情緒ではない」。一方、希望の典型的な身体表現を想像することは、情緒よりも限定的に可能である。例えば、人が祈りの格好をすることがそれにあたる。だが、動物の希望の表現が典型に含められることはない。なぜなら、動物の希望の身体表現一例えば犬が餌をねだる身ぶりは、希望の典型というよりもむしろ欲求の典型的な身体表現だと考えられるからである。このような限定的な意味において、希望と情緒は同列に扱われうる。

次に、希望と信念が似ているとはどういうことか。二つ目の段落でウィトゲンシュタインは、「絶え間ない」という表現を付け加えた文の意味を考えてみるよう読者に勧める。「絶え間ない痛み」の意味は、例えば、昨晚から今朝にかけて締め付けるような腹痛が持続するということである。ここには痛みの持続、いわば内的過程の持続が存在する。続いて「絶え間ない怒り」の意味は、例えば、約束の時間になっても友人が待ち合わせ場所に現われず怒っているということである。ここには、友達に対して文句を言ってもやりたいという気持ちの持続、いわば怒りの心的状態の持続が存在する。しかし、怒りは必ずしも心的状態の持続を必要としない。例えば、十年間ある政治家の暴政に怒りを感じてきたということは、文字通りの意味で、十年間のあいだ一度

も途切れることなく政治家を失脚させようという心的状態を持続させてきたということの意味しない。つまり、怒りには、心的状態の持続が問題になる場合と、心的状態の持続が問題にならない場合が存在するのである。そして、心的状態の持続が問題にならないという意味では、信念や希望はまさにそれに合致するものである。「絶え間ない信念」や「絶え間ない希望」という表現が適切であるか否かは別として、「彼のことを三日間だけ信じてみよう」という信念や「お父さんが十年後も生きていますように」という希望を考えるにあたって、心的状態が持続するか否かということは問題にはならない。この意味で、「希望は信念と似ている」(BPP II §154)のである<sup>4</sup>。

続いて、三つ目の段落でウィトゲンシュタインは、眼前にある対象に対して反応する場合と、そうでない場合とに分けて「二つの異なった言葉を用いることができる」といった。この想定は、実際に二つの異なった言葉が存在するか否かに関わらず、そのような言葉があってもよかったということの意味する(Z §122)。まず、眼前にある対象に反応する場合は、「私に吠えかかる犬に対する恐怖」の場合である。一方、眼前にはない対象に向かって思いなす場合は、「ある出来事に対する恐怖(心配 apprehension)」や「憧憬」である。ある出来事に対する恐怖とは、一ヶ月後のテストを恐れるというように、出来事に対して不安を感じることである。憧憬とは、自分のイメージや思い出の中にある風景や土地、人物に対して思いを馳せることである。前者を「眼前に対象をもつグループ」、後者を「眼前に対象をもたないグループ」と呼ぶとすれば、両者を同じ「恐怖」という言葉によって表現できるとしても、別の言葉を用いて区別してもよいとウィトゲンシュタインは提案する。それはちょうど、「期待する」が特定の内容を志向する場合のみならず、心的状態を意味し「待ちわびる」と言われる場合もありうるのと同様であるという。

以上の考察でウィトゲンシュタインが目指したことは、一定の基準によって概念をカテゴライズすることよりも、概念を相互に比較することによって心理的諸概念の特徴を明らかにし、さらに特徴を共有するグループを想定してみることによって、諸概念同士の関係の見晴らしを良くしようとするのであった(PU §122)。それゆえ、「ウィトゲンシュタインの区別は、どのような基準に基づいてなされたものなのだろうか」と問うたのは厳密ではなかつ



た。代わりに、ウィトゲンシュタインの区別は、どのような指標に基づいてなされたものなのだろうかと問うべきであったろう。

今や、ウィトゲンシュタインの区別はどのような指標に基づいてなされたのかという問いに答える準備が整った。本節冒頭で引用した『哲学探究』第二部1節において、ウィトゲンシュタインが情緒と希望を区別し、眼前にある対象に対する信念と未来に対する信念とを区別した理由は、典型的な身体表現の有無や、「眼前に対象をもつグループ」と「眼前に対象をもたないグループ」の区別を念頭に置いていたからなのである。

『哲学探究』第二部1節一段落目の、情緒と希望の区別は、典型的な身体表現の有無を鑑みたものである。情緒の典型的な身体表現には、動物の振る舞いが含まれる。しかし、希望の典型的な身体表現に、動物の振る舞いは含まれない。犬が餌をねだるしぐさは、希望の中でも願望に近い振る舞いであり、希望ということでわれわれが了解している典型的な身体表現には含まれない<sup>5</sup>。

同節二段落目の、「ある犬が、自分の主人が戸口にいと信じている」と「犬は、自分の主人が明後日やってくると信ずる」の対比は、「眼前に対象をもつグループ」と「眼前に対象をもたないグループ」の区別へと重なる。ウィトゲンシュタインは、犬に前者のグループに属する信念を適用することには抵抗を示さなかったが、後者のグループに属する信念を適用することには抵抗を示したのである。

本節では、ウィトゲンシュタインが人間と動物のあいだに類似性と断絶を見てとっていたということを、心理的諸概念の考察を背景に検討した。心理的諸概念は、典型的な身体表現の有無、心的状態の持続が問題になるか否か、志向する対象が眼前にあるか否かによってグループに分けられる。こうしたグループ分けは、ウィトゲンシュタインが犬に対して考えた概念適用の可否と一致するものである。つまり、人間と動物の境界付けは、心理的諸概念のグループ分けに重なる。このことから動物は、ウィトゲンシュタインにとって、心理的諸概念の区分を考えるうえで念頭に置かれていた存在だということができるだろう。

### 3. 思考概念におけるゆるやかな断絶

ウィトゲンシュタインの心理的諸概念のグループ分けは、人と動物を隔てる境界付けと重なるものであった。だが、心理的諸概念の一環として考察されていた「考える」という言葉はどうだろうか。ウィトゲンシュタインは、『心理学の哲学 2』12 節において、とりわけこの言葉の扱いに注意を払っていたように見える。

考えるという言葉は、例えば「痛い」や「悲しい」等々とは、ある意味で全く違った仕方で使用される。人は心的状態の表出として「私は考えている」とは言わない。せいぜい、「私は考え中だ」とか「邪魔しないでくれ。私は……について考え中なんだ」と言うくらいである。むしろ、それが意味するのは「邪魔しないでくれ、私は今しかじかの振る舞いをしているのだ」ということではない。それゆえ、〈考える〉という概念は振る舞いではない。(BPP II §12)

ウィトゲンシュタインは、「考える」を、情緒の言葉とは区別して考えていた。ここで区別の指標とされているものは、心的状態(もしくは内的状態)の表出であるか否かということである。「私は歯が痛い」や「私は大事な人を亡くして悲しい」は、心的状態がどのようなものであるかを表している。しかし「私は考え中だ」という発言は、自分の心的状態のありようを示しているのではない(Cf. BPP II §253, 266)。代わりにウィトゲンシュタインは、「私は考え中だ」という発言が「邪魔しないでくれ、私は……について考え中なんだ」と同じ効用をもつということを示唆する。だがこの表現は、「邪魔しないでくれ、私は今しかじかの振る舞いをしているのだ」ということではないという。例えば、「邪魔しないでくれ、私は今縄跳びをしているのだ」という表現とは異なる。つまり「考え中」であるということは、内的状態の表出でもなければ、運動についてそう呼ぶ言葉でもない。

この 12 節を見る限りでは、ウィトゲンシュタインは「考える」概念を身体性から切り離し、目に見えないところで行われる知的な活動を意味するものと

して把握しようとしているように見える。それゆえ、「考える」を動物に適用することはただちに退けられると推測されるかもしれない。だがこの解釈と推測は正しくない。なぜなら、ウィトゲンシュタインは決して「考える」概念を身体性から切り離してはいなかったからである。以下の『断片』122 節<sup>6</sup>では「考える」の多様な使い道が考察されており、作業したり声に出したりする振る舞いへの適用もその中に含まれている。

われわれの言語には様々な種類の言葉があってもよかったのだ、ということをよく考えてみよ。〈声に出して考える〉ための言葉、想像の中で独り言を言いながら考えるための言葉、何らかのものがわれわれの念頭に浮かび、それから確信をもって答えることができるような休止のための言葉。

文で表現される思想のための言葉、私が後から〈思想を言葉で言い表す〉ことができる閃きのための言葉、言葉を使わずに考えながら作業するための言葉。(Z §122)

ウィトゲンシュタインは、思考現象の多様性に応じた多様な概念が存在してもよかったと考えている(Cf. BPP II §220)。例えば実際には存在しないような言葉、すなわち想像の中で考える場合の「思考」や、文で表現される思想のための「文考」、閃きのための「閃考」といった言葉を使う民族を想像することができる。このようにウィトゲンシュタインは、思考概念が多様な現象に使われていることを認めた上で、情緒や振る舞いとは異なった使い方をもつことを示唆したのである。先に引用した『心理学の哲学 2』の 12 節で「ある意味で全く違った仕方で使用される」と制限的なニュアンスを加えたのも、こうした配慮に基づいている。

さらに、「考える」を動物に適用することがただちに退けられるとは言えない理由もある。ウィトゲンシュタインが認める思考現象の多様性には、猿の生活も含まれていた。同書の 224 節においてウィトゲンシュタインは、天井にぶら下がったバナナをとるために二本の棒を使って試行錯誤する猿を、非常に長い記述によって考察している。

その猿は何かを熟考しているのだ、と私は言おう。……彼が例えば戯れにある手順を作り出し、今度はそれをあれやこれやを行なうための方法として用いるならば、彼は考えているとわれわれは言うだろう。……  
(BPP II §224, 傍点強調は原文)。

ただしウィトゲンシュタインは、すべての猿が常に考えながら生活していると言っているわけではない。「人は二匹のチンパンジーを彼らの仕事のやり方に関して区別し、一方は考えており、他方は考えていない、とすることができるだろう」(BPP II §229)。ウィトゲンシュタインの眼目は、猿の生活にも思考概念の適用の余地があることを示し、同時に思考概念が適用される場面がどのような状況であるかを示すことにあった。

思考は彼[猿]に、自分の方法をより完全なものにするための可能性を与えてくれるのである。というよりはむしろ、一定の仕方で自分の方法をより完成に近づける時に、彼は〈考える〉のである。(BPP II §224, 傍点強調は原文, []内挿入は引用者)

人はまた、こうも言うことができよう。彼が一定の仕方で学ぶときに、彼は考えるのだ、と。(BPP II §225, 傍点強調は原文)

このように、ウィトゲンシュタインは思考概念が適用される状況を考察する中で、猿に対して「考える」という言葉を適用することを認めていたのである。だがウィトゲンシュタインは、猿以外のすべての動物に対しても同じ態度を取るわけではない。他の動物に対して「考える」を適用することに彼は、慎重な態度を示す。

人はテーブルや椅子について、それらは考える、とは言わない。また植物についても、魚についても言わなければ、犬についてもほとんど言わない。しかし、人間についてはそのように言う。もっとも、すべての人

間について言うわけではない。(BPP II §192)

ここでウィトゲンシュタインは、他の動物への概念適用を一概に退けるのではなく、個々の種に対して「言わない」や「ほとんど言わない」と段階的に言及し、決定的な判断というよりは暫時的な判断を下している。こうしたゆるやかな区別ともいえる判断の背景には、次のような問題意識が控えていた。

われわれは例えば人間についてのみ「考える」という言葉を口にすることを、つまり人間について「考える」を主張したり否定したりすることを学ぶ。「魚は考えるだろうか」という問いは、われわれの言語使用の中には存在せず、そのような問いは立てられはしないだろう。(このような状態、このような言語使用よりも、もっと自然なものが何かありうるだろうか！)(BPP II §201, 傍点強調は原文, 下線部強調は引用者)

下線部で強調された部分からは、ウィトゲンシュタインがわれわれの自然な言語使用<sup>7</sup>のあり方に問題意識を注いでいたことが理解される。先の段階的かつ非決定的な判断も、われわれの言語使用のあり方を顧慮するものであっただろう。なぜなら、「考える」を適用する具体的な状況を完全に網羅することはできないので、必然的に判断は部分的(段階的)かつ暫時的(非決定的)にならざるをえないからである。

本節では、心理的諸概念の一環として考察されながらも、独自の用法をもつものとして扱われた思考概念の適用に際して、ウィトゲンシュタインが人間と動物のあいだにゆるやかな区別を見ていたことを検討した。思考概念は、内的状態の表出でもなければ、身体運動を指すものでもない。だが思考概念は多様な状況において使われてよく、猿への適用もその状況がどのようなものであるかを明らかにするものであった。猿以外の動物に対してはほとんど適用されないという段階的で非決定的な判断も、同じ背景のもとに理解される。ウィトゲンシュタインにとって動物は、人間にある程度似た生活を送る存在者として、思考概念の適用される状況を考えるうえで重要な存在であったといえるだろう。

#### 4. 概念適用における基準

ウィトゲンシュタインによる思考概念の使用状況をめぐる考察、心理的諸概念のグループ分けは、動物への適用を試してみることによって進められたと考えられる。だが、ウィトゲンシュタインにとって人と動物の境界付けは、言葉の使用状況を明らかにするための手段でしかなかったのだろうか。

ウィトゲンシュタインのテキストにおける動物の存在意義とは何だったのだろうか。もし動物の考察を単なる手段としてとらえるならば、人間と動物の境界付けは、未開の民族の営みを考察することと同じく、われわれと生活形式(PU §19)を共有する範囲がいかほどであるかを教えるものであっただろう。こうした評価は、後期ウィトゲンシュタインの傾向と一致しているという意味で、ひとまず妥当なものであると考えられる。だが、こうした評価に留まらない動物の考察の積極的意義をいうことはできないのだろうか。ウィトゲンシュタインが言語の原初的形式たる反応の水準に人と動物の類似性を認め、心理的諸概念の考察に動物との対照が役立てられたことを、彼の哲学においてなくてはならないものだったということではできないだろうか。本節では、動物の存在意義を評価するねらいで、ウィトゲンシュタインが概念適用をそもそものようなものと考えていたのかを検討する。

この問題を考えるうえで参照すべきは、次の箇所である。

さて、われわれが作業をしている存在者を見ており、これらの人々が喋らないということを除けば、彼らの作業のリズムも表情の動き等々もわれわれにそっくりであるとすれば、われわれはおそらく、彼らは考え、熟考し、決断した、と言うことだろう。すなわち、まさにある場合において普通の人間に似ているものが数多くあることだろう。われわれの生活の中に住处をもつ(考える)という概念を彼らにも適用するための権利があるとしても、そのためにどれくらい似ていなくてはならないのか、ということとは明確ではない。(BPP II §186, 傍点強調は原文)

ウィトゲンシュタインは、ある存在者に「考える」を適用することを、その存

在者と人間のあいだで数多くの振る舞いが似ていることに言い換えている。ただし、彼は類似性の程度を確定しようとはしない。「数多く」とはいうものの、「どれくらい似ていなくてはならないのか」については明確ではないという。さらに後続の節では、そもそも概念適用の基準を立てるために類似性の程度を決定する必要性に疑問を呈している。

また、何のためにわれわれはこの決定を下すべきなのか。

われわれは、複雑な作業でさえもそれを〈機械的に〉片付けるすべを学ぶことのできる存在者と、作業にあたって試したり比較したりする存在者とのあいだに、重要な区別を立てることができるだろう。—しかし、「試す」とか「比較する」と呼ばれるものを、私は再び実例を挙げて説明できるだけであり、またこれらの実例はわれわれの生活から、あるいはわれわれの生活に類似した生活から取り出されるのである。(BPP II §187)

ウィトゲンシュタインは、あくまで概念適用の可否による存在者の区別を尊重するが、区別の基準を探そうとしても、われわれの生活やそれに類似する生活から引き出した具体例によってでしか提示できないという。つまり、両者の生活が違うからこそ概念適用の可否が分かれる以上、生活の違いを示す基準があると思われるかもしれない。だが違いを示す基準を探してみても、その基準は再び実例によって説明されるものとなる。概念適用の背後にある生活の差異を表現するためには、再び概念適用を必要とする。ここには循環がある。

ここでウィトゲンシュタインは、概念適用の際に問題となる生活の類似性の程度を確定しようとしないうという考えからさらに進んで、そもそも概念適用には何らかの基準を必要とするという考え方そのものの破棄へと至っているようにみえる。なぜなら、彼はそもそも基準を明確にする必要性に懐疑的であるばかりか、もし基準を探したとしても循環があると考えているからである。そうだとすれば、ウィトゲンシュタインにとって概念適用の可否とは、何らかの基準に照らし合わせて可能か不可能かを決定することではなく、われわれが端的にそのように言うか言わないかであることになろう<sup>8</sup>。

このことは、ある「存在者」が動物の場合でも同様である。ウィトゲンシュタインは、動物への概念適用の可否を決定する基準には言及せず、概念適用を実際にやってみることによって、人間と動物の生活のあいだに横たわる類似性の程度を示す<sup>9</sup>。

しかし、もし私が「テーブルは考えない」と言えば、それは「テーブルは成長しない」のような発言と似たものではない。なぜなら、テーブルが考える〈とすれば、それがいかにしてであるのか〉、私は決して知ることがないだろうからである。そして、ここには明らかに、人間の場合への段階的な移行(ein gradueller Übergang)が存在する。(BPP II §192, 下線部強調は引用者)

「テーブルは考えない」という文と「テーブルは成長しない」という文は、双方ともわれわれの自然な言語使用には登場してこない表現である。つまりそのような概念適用は基本的にはなされない。しかし厳密に言えば、二つの文は異なった理由から、自然な言語使用には登場してこないといわれる。「テーブルは考えない」という表現は、テーブルに関して考えるとか考えないというための背景を著しく欠いている。「バッタは考えない」という文が、教育的効果をもった自然誌的記述<sup>10</sup> という使い道を与えられていたことに比べれば、「テーブルは考えない」という文はその使い道さえない。このことが、「テーブルが考える〈とすれば、それがどのようなものになるか〉、私には知るよしもない」といわれるゆえんである。一方、「テーブルは成長しない」という表現は、それとは異なっている。確かに、われわれの自然な言語使用には登場してこない文であるが、その使い道を考えることはできる。例えば、木製のテーブルが、木が伸びるように何メートルも伸びると誤って信じている人がいるとすれば、その人に対して「テーブルは成長しない」と教えてやることができる。それゆえ二つの文は異なっている。

このように考えると、テーブルから人間への「段階的な移行」とは、次の三つの存在者の区分に等しいだろう。すなわち、「考える」も「考えない」も適用されない存在者、「考える」は適用されないが「考えない」が適用される存在者、



「考える」「考えない」の両方とも適用される存在者である。第一の区分には、われわれの生活との類似性が極めて乏しいか、もしくは生活ということそのものを想像することができない存在者、例えばテーブルや植物が含まれる。第三の区分は、われわれの生活やそれに類似する生活を営む存在者、例えば人間の大人や猿が含まれる。第二の区分に含まれる存在者は、非常に幅広くある。われわれの生活と一定の類似性をもちながらも、「考える」か否かが基本的に問題にならない存在者である。魚やワニ、鳥や一部の哺乳類が含まれるだろう。

だがこのように三つの区分に分けたところで、それぞれの区分の中にさらに細かい区分ができることはいうまでもない。人間の大人と猿に対して全く同じように概念適用するわけではないからである。これを境界線の複数性と呼ぶことができるだろう。ウィトゲンシュタインが 192 節で「段階的移行」という言葉を使った背景には、このように概念適用を試してみることによってはじめて成立するゆるやかな存在者の区分<sup>11</sup> という把握があったのである。

複数の境界線は、何らかの基準を持ち出してきたとしても、唯一のものに決められるわけではない。シグナルの有無、音声的コミュニケーションの有無、家畜化が可能か否か、語彙数が豊富であるか否か、偽りをなすか否か。こうした基準は、「考える」概念がどの存在者に対して積極的に適用されるようになるかを定めることには役立たない。なぜならば、概念適用とは基本的に個々の状況を鑑みてなされるものであり、その状況は存在者の性質によって一概に決まるわけではないからである。例えば、音声的コミュニケーションをする様々な動物がいるが、そのすべてに「考える」を適用するわけではない。また語彙数が極端に少ない人がいたとしても、そうした人に対して「考える」を適用しないと一概に決めることはできない。われわれにできることは、具体的な存在者や状況を挙げて、概念適用をするかどうかを試してみることにはしかない。もし「考える」を適用するならば、われわれはその存在者の生活に類似性を見るということになり、そうでないならば、われわれはその存在者に対して差異を見るということになる。このように考えると、概念適用の際に基準を求めることは、概念適用の可否によってはじめて理解されてくる生活の差異をあたかも区別の根拠であるかのように提示したものにすぎない

ことがわかる。

以上の考察からして、ウィトゲンシュタインが「われわれの生活の中に住処をもつ(考える)という概念を彼ら[喋らない人々]にも適用するための権利があるとしても、そのためにどれぐらい似ていなくてはならないのか、ということとは明確ではない」(BPP II §186, []内挿入は引用者)、「何のためにわれわれはこの決定を下すべきなのか」(BPP II §187)といった理由が、単に概念適用の基準の不明瞭さを示すのではなく、適用基準という考え方そのものへの異議であったということは確かであると思われる。もちろんこのことは、言葉を定義することや、記号操作に厳密さを要する分野があるということを否定するものではない。そうではなく、われわれが普段言葉を用いるとき、いつも基準を念頭においているという見解が退けられるのである。

こうしたウィトゲンシュタインの議論が、動物への概念適用を考察する中で提示されてきたものであるということは重要である。すなわち、ウィトゲンシュタインは『心理学の哲学2』において、概念適用の可否を定める基準の存在に懐疑的であり、さらに実際の概念適用で基準に照らし合わせて可否が決まるという見解にも反対であっただろう。こうした境地に至らせる考察の土台となったのは、動物への概念適用を検討することだった。つまり、人間と動物のあいだには生活の類似性の強弱を示す段階的移行があり、どの点で両者を決定的に隔てるかを決定する必要はないという考えと、概念適用の可否を決定する基準の存在を不要なものとみなす考えは、まさに同根のものなのである。ここに、動物の存在意義が、ウィトゲンシュタインの哲学と切り離せないと考えられる理由がある。

## 5. 結語

本稿では、ウィトゲンシュタインのテキストにおける動物の存在意義を、『心理学の哲学2』を中心に検討してきた。ウィトゲンシュタインにとっての人間と動物の関係は、段階的移行という言葉に集約されている。段階的移行という思想は、人間と動物のあいだのゆるやかな区分を示すものであり、彼が動物をわれわれと似た生活を営む身近な存在者とみなしていたことを示す

だろう。加えて段階的移行という概念は、ウィトゲンシュタインのテキストの中で、概念適用にまつわる問題が通奏低音となっていることを示す。つまり、心理的諸概念のグループ分けや言葉の使用状況の考察は、段階的移行を示す作業の一環ととらえることで、概念適用の問題という大きな思索の流れに統合されるのである。人と動物の境界問題を考えることと、概念適用の問題を考えることは分離しがたく密接に結びついているのである。このことは、ウィトゲンシュタインのテキストにおける動物の存在が、なくてはならないものであったことを示すだろう。

## 註

1. ウィトゲンシュタインの議論の領域でしばしば論じられてきたのは、「動物は言語をもつか?」という問いや、これに併発する「言語と呼ぶに足る基準は何か?」という問いであり、動物がどのような位置付けにあるかではなかった。まとまったものでは、1993年の『科学基礎論研究』21巻3号, pp. 107-33における特集「動物の言語」がある。こうした議論の根本的な問題は、「言語と呼ぶに足る基準は何か?」という問いがどのような問題であり、これをウィトゲンシュタインの議論の領域で論じることができるかどうかについて反省的でない点にある。  
また本稿は、ウィトゲンシュタインにおける動物の扱いを検討するものであり、動物的な人間観を検討するものではない。後期ウィトゲンシュタイン哲学における動物的な人間観とは、人間の自然的本性や身体性に着目する傾向を指す。この傾向に着目した議論がウィトゲンシュタインの自然主義的解釈(e. g. Marie McGinn (2010) “Wittgenstein and Naturalism”, In Mario de Caro & David Macarthur (eds.), *Naturalism and Normativity*. Columbia University Press.)と呼ばれるものである。本稿の議論は、心理的概念における身体表現に着目する点においては、自然主義的解釈に関わっている。だが本稿は、人間ではなく動物の位置付けに重点があるという意味で、そうした自然主義的解釈とはひとまず区別される。
2. 原初的な形式は、感嘆詞にとどまらない、分節化された言葉を使う言語ゲーム—すなわち人間に固有の応答関係にも通底している。このことをウィトゲンシュタインは「われわれの言語ゲームは原初的な振る舞いの拡張である」(Z §545)と言い表している。
3. 非言語的なやりとりにおける人と動物の類似性を明確に主張したのは、黒田亘(1983)「ヒトと動物の境」、『知識と行為』, 東京大学出版会, pp. 80-103である。本稿はこの論文から多くの洞察を得ている。私と黒田が異なる点は、黒田が人と動物を決定的に隔てる基準として「置換作業」を提示し、人と動物の断絶を論じたのに対し、私は、むしろ断絶を根拠づけるために基準を設けることはできない、と考える点にある。この点は四節で扱う。

4. 内的過程や心的状態の持続が問題になる場合とならない場合の差異は、「どれくらいのあいだ、あなたはそれをもっていたのですか」という質問とそれに対する回答を考えると理解しやすい(LW I §2)。腹痛の場合は、「昨晚から今朝まで、だいたい八時間くらいです」と回答できる。約束を破った友達に対する怒りの場合の回答は、「一時間くらいずっとイライラしている」であり、政治家に対する怒りの場合には、「十年間、寝ても覚めてもだ」である。信念の場合は、「三日間だけ」と答え、希望の場合は「十年後も、いや、それを超えてもずっと希望しているわ」と答えられる。ここで持続が問題になっているのは、腹痛と約束を破った友達に対する怒りの場合だけであり、それ以外の場合はある心的状態が文字通りの意味で持続しているということの意味しない。つまり、仮に心的状態が途中で途切れることがあったとしても、一定期間のあいだ怒っている、信じている、希望していると言うのである。
5. ここで、動物に情緒概念を適用することを、擬人化と呼ぶべきではないだろう。なぜなら擬人化とは、通常はそのような使い方をしないような言語使用のことだからである。例えば、われわれにとって「海が泣いている」や「風が笑っている」といった表現は、無意味ではないが、文字通りの意味では理解できない表現である。人間が笑うのと同じように風が表情を作って笑い声をあげているということは理解できない。「海が泣いている」や「風が笑っている」は、「波が激しく打ち寄せている」や「風がさわやかに吹いている」など、より自然なしかたで表現可能である。よってこうした表現は、擬人化であるといえる。一方われわれは、「犬が怒っている」という表現を「彼は怒っている」と同じように使い、文字通りの意味で理解できる。「犬が怒っている」よりも、自然な表現を探す必要はない。それゆえ、こうした表現は擬人化ではない。われわれは、人間に対してと同じように、動物にも情緒概念を適用する。犬が悲しみ、恐れ、喜ぶという表現は、決して擬人化ではないのである。
6. この箇所によく似た箇所としては、『心理学の哲学 2』215 節がある。「人は例えば二つの(あるいは二つ以上の)異なった言葉を所有することができるだろう。(声に出して考える)ための言葉、想像の中で考えながら話すための言葉、何らかのことがわれわれの念頭に浮かび(あるいは浮かばず)、それから確信をもって答えることができるような休止のための言葉。われわれは二つの言葉をもつことができるだろう。文で表現される思想のための言葉、私が後から(思想を言葉で言い表す)事ができる閃きのための言葉。」(BPP II §215)
7. 本稿で詳しく論証することはできないが、ウィトゲンシュタインが「自然な言語使用」というとき二つの意味が込められていると思われる。第一に、言語を誰かが目的意識をもって創造し手を加えることによってできたものとは考えないという含意である。第二に、言語の営みにおいては手段と目的とが一致しており、言語を使うことからさらに目的を分離して考えることが難しい。それゆえ言語を使うことが常に何か別の目的をもっているとは言えないという含意である。例えば、挨拶や子どもの遊びを考えてみるとよいだろう。二つの含意の詳しい展開は今後の課題としたい。
8. こうした方針は、『心理学の哲学 2』や『哲学探究』第二部以前に執筆された『哲学探究』第一部から引き継がれたものである。「人は、しばしば、動物たちは精神的な能力を欠いているから話をしない、と言う。そして、このことは、「かれらは考えない、それゆえ話をしない」ということである。しかし、動物たちは単に話さないのである。もしくはこう言った方がいい。彼らは言語を使わない—もしわれわれが、もっとも原初的な言語形態を度外視するとすれば。—命令し、問い、物語り、しゃべることは、歩くことや食べること、飲むこと、遊ぶことがそうであるように、われわれの

自然誌の一部である。」(PU §25, 下線部強調は引用者)この箇所ではウィトゲンシュタインは、「精神的な能力 *die geistigen Fähigkeiten*」によって話をしたり考えたりするという見解に陥ることを避けるため、「かれらは考えない、それゆえ *darum* 話をしない」という表現ではなく、「動物たちは単に *eben* 話さないのである」「彼らは言語を使わない *nicht verwenden*」と言い換えた。『哲学探究』第一部においてすでにウィトゲンシュタインは、能力の欠如に訴える表現から、動物たちは単にそれをしないというより自然な表現を使うよう促していたのである。

9. 段階的移行という概念に着目して人と動物のあいだのゆるやかな区別を指摘するという私の主張にもっとも近い立場は、ジョセフ・L・リンチ(1996)“*Wittgenstein and Animal Minds*”, *Between the Species*, Vol. 12, no. 1, pp. 47–52 である。リンチは、ウィトゲンシュタインが動物の能力についての一般理論を唱えたわけではないことを指摘し(p. 48), ウィトゲンシュタインにとっての問題は、諸特徴をもった生活を共有しているか否かであると主張した(p. 48)。またリンチは、ウィトゲンシュタインが人と動物のあいだに決定的な境界線を引こうとはしなかったということは認められたものの、彼がどこかに境界線を引こうとするつもりではあったと主張している(p. 49)。私はリンチのこの主張に基本的には賛成である。しかし、次の主張には注意したいと考えている。リンチは、人と動物の区別を、犬にとっての概念とわれわれにとっての概念とが同じではない、という点に見ていた(p. 51)。私は、犬にとっての概念とはいかなるものであるのか疑問に思う。それに、何らかの基準によって区別を図ることは、一見区別を根拠づけているように見えて、実はあらかじめ概念適用の可否によって区別されたものをあとから根拠づけているにすぎないのではないかと思われる。

10. 「自然誌」は、使い道のない文の使用可能性を思い描くための背景として設定された概念である。「人間は考えるが、バツタは考えない」。この文は例えば、次のことを意味している。(考える)という概念は人間の生活に当てはまるが、バツタの生活には当てはまらない。そして、「考える」という日本語の言葉を理解していない人や、その言葉が例えばバツタの行為に当てはまると誤って信じている人に対しても、このような報告を行なうことができるだろう。」(BPP II §23, 下線部強調は引用者)

われわれの自然な言語使用の中に、「バツタは考えない」という表現が使われる場面はほとんど存在しない。だが、このことはただちに「バツタは考えない」という表現が無意味であるということの意味しない。この文は、誤ってバツタに対して「考える」という概念が適用されると信じている人に対する教育のかけ声として、使用されることがありうるからである。「バツタは考えない。」この文はどの領域に属するか。—これは信条なのか、それとも自然誌に属するものなのか。もし後者であるとすれば、それは例えば「バツタは読み書きができない」というような文ということになる。この文は明確な意味をもっており、たとえ使用されること決してないとしても、その文の使い道を思い描くことは容易である。」(BPP II §24)

11. デヴィッド・ドゥグラツィア(1994)は“*Wittgenstein and Mental Life of Animals*”, *History of Philosophy Quarterly*, Vol. 11, no. 1 において、ウィトゲンシュタインの動物の扱いが「常識的」(p. 129)で「公平」(p. 132)である一方で、種によって動物の扱いが異なるのはなぜか、と疑問を呈する。ドゥグラツィアは、ウィトゲンシュタインにとって動物が問題になる理由を、概念適用との関係によってではなく、動物の能力の問題としてとらえていたようにみえる。もしそうだとすれば、ドゥグラツィアの解釈には問題がある。なぜならウィトゲンシュタインは、「過去を振り返ることので

きる者だけが、後悔することができる。だが、このことは、経験上そのような者だけが後悔の感情をもつ能力を有する、ということの意味するものではない。」(BPP II §309)と述べているからである。詳しくは次の通りである。

ドウグラツィアは、ウイトゲンシュタインが『哲学探究』第二部1節において、動物に対して単純な思考を認めるにもかかわらず、『断片』522節(「ワニが口を開けてある人間に近づくと、それによって、何かを意味しているかどうか、われわれはほとんど尋ねはしないだろう。そしてわれわれは、次のように説明するかもしれない。ワニは考えることができないのであり、それゆえここにおいては意味するということは元来問題にならない。(Z §522, 下線部強調は引用者)」)において、「ワニは考えることができないのであり、それゆえここにおいては意味するということは元来問題にならない」といったのはなぜか、という疑問を提示する(pp. 131-2)。この疑問に対しドウグラツィアは、三つの回答を準備している。第一に、爬虫類は哺乳類よりも原始的であり、ニュアンスのある振る舞いができないがゆえに、ウイトゲンシュタインはワニが思考しないと書いた(p. 132)。第二に、ウイトゲンシュタインは「考える」という語によって「言語を使って考える」ことを意味しており、非言語的思考は何ものかを表す記号とはならないがゆえに、何ものをも意味しない。ただし、この考えをウイトゲンシュタインのものともみなしてよいかどうかには議論の余地があるという(p. 132)。第三に、ウイトゲンシュタインの『断片』は『哲学探究』と比較してはるかに編集不足であり、実験的な思索が残されたままである。それゆえ、522節はちょっとした間違いであり、動物に関するウイトゲンシュタインの総合的な見解と相容れないものである(p. 132)。こうしたドウグラツィアの回答から読み取れることは、三つある。第一にドウグラツィアは、「ニュアンスのある振る舞いができないがゆえに」というように、爬虫類の振る舞いの能力を問題にしている。第二に、「考える」ということに一定の基準があるかもしれないと考えている。第三に、ウイトゲンシュタインから完全に納得できる理由を導きだすことが難しいかもしれないと考えている。

ドウグラツィアの見解に対して指摘すべきことは二つある。第一に、ウイトゲンシュタインが動物に単純な思考を帰したというドウグラツィアの解釈が厳密ではないことである。厳密に言えば、「動物は……」で始まる自然誌的記述がなされる場合、ウイトゲンシュタインは情緒概念に関してはその適用を認めるが、思考概念についてははっきりと退けている(PU §25)。ドウグラツィアがこのような誤りを犯した理由は、彼の第一の回答を見るかぎり、ウイトゲンシュタインが動物の能力に関心をもっていたと誤解していたことに起因すると思われる。実際のウイトゲンシュタインの関心は、ある概念がいかにか適用されるかという、われわれの自然な言語使用に向けられていた。ウイトゲンシュタインが犬に一定の情緒概念の適用を認めたのは、犬が感情を抱く能力をもっているからではなく、われわれにとってそれが自然な言語表現だからである。第二に、ドウグラツィアは『断片』522節の後半部を誤読していたと思われる。下線部で強調した後半部は、接続法の二式で書かれており、実現の可能性が低い事態を記述している。それゆえ後半部は、ウイトゲンシュタイン自身の見解を直接的に記述したのではなく、ある特殊な事態においてこのような説明をすることもひょっとするとありうる、という示唆として理解すべきであろう。もしこの通りであれば、前半部は「ほとんど尋ねはしない」問題ではあるが、万が一尋ねられた場合、「ワニは考えることができないのであり、それゆえここにおいては意味するということは元来問題にならない」という説明をしてもかまわないと

いうことを意味する。次のような例で説明しよう。「人間はどこで産卵するのか」という奇妙な問いに対してもっとも自然な回答は、「何を言っているんだ、そんなことは問題にならない」と問いに対する抵抗を示すことである。しかし、「人は卵を生まないから、どこかで産卵したりしない」という説明を与えることもありうる。ウィトゲンシュタインが後半部で示したことは、万が一奇妙な問いが発せられた場合に、説明を与える場合がありうるということだと理解できる。かくして、ドゥグラツイアの解釈に反し、『断片』522節の後半部は整合的に理解される。

ウィトゲンシュタインのテキストの略号

Z: *Zettel*, Suhrkamp, 1984

UW: “Ursache and Wirkung”, in Wittgenstein, L., *Philosophical Occasions 1912-1951*, Hackett, 1993, pp. 370–405

PU・PU II: *Philosophische Untersuchungen*, Wiley-Blackwell, 4th ed., 2009

BPP II: *Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie Band 2*, Suhrkamp, 1984

LW I: *Last Writings on the Philosophy of Psychology, vol. II*, Blackwell, 1982

なお、邦訳にあたって大修館書店のウィトゲンシュタイン全集を参考にし、適宜表現を変えて使用した。

